

■（２８）教室でも被災地に思いを寄せてみて！

ドンドンと突き上げてきたかと思うと激しく横に揺れる。テレビが消え、ファクスが消え、照明が消える。７日深夜の余震。震度６強を初めて体験した。机の下にもぐったのも初めて。そして夜通しの取材が始まる。津波警報に緊張が走った。

被災地の仙台に入って６日。三陸海岸は言葉で簡単には表現できない惨状だ。「何もなくなった」としかいいようがない。そういう光景が入江ごとに延々と続く。その中でも壊滅状態と言われる南三陸町の避難所に向かう際、同僚から預かった段ボール２箱を持ち込んだ。中身はコミックまんがとまんが雑誌。世話をしている人たちの了解を得て、玄関脇の臨時の本棚に並べた。とたんに、子どもたちが集まる。若いお母さんも手にしていた。

一緒に持ち込んだ新聞１０数部も遠慮がちに「よければどうぞ」と差し出すと、職員は快く受け取ってくれる。電気のない避難所暮らしで、子どもだけでなく大人も「活字」に強い関心を持ってきている。新聞も郵便も配達する側も命がけの毎日だ。

被災した子どもの記事も多い。ぜひ教室でも被災地に思いを寄せてもらいたい。（山）